ア地域にはフェイバナナ *Musa fehi* があり，別の栽培品種ができている．これは普通のバナナとは別の節 Sect. Australimusa に属し，染色体の基本数10，果房は直立する（普通のバナナ Sect. Eumusa は基本数11，果房は垂れる）．

日本には小笠原と沖縄にシマバナナがあり，果実は小形で黄熟，皮が薄い．バショウは本州北部まで栽培され，バナナ属中最も耐寒性が強い．沖縄にはイトバショウがあり，茎（葉柄の部分）から繊維を取って芭蕉布が作られる．フィリピンのアバカも同様繊維が取れるが，この方は強靭で耐湿性の強いマニラアサで，ロープ・漁網・衣類・紙などの原料になる．その他バナナ属の種類には解熱など薬用になるもの，鑑賞用として植えられるものなどがあるが，何と言っても食物としてのバナナ産業は大いに有望で，21世紀の食料問題はバナナなしには解決できないだろうと結んでいる．

（伊藤　洋）

緑区・自然を守る会：**カタクリの咲く谷戸に**（横浜・新治の自然誌）80pp. 1991. 文一総合出版，〒162 東京都新宿区西五軒町 13－10，￥2,000（税込）．

横浜市西北部の緑区は，北の川崎市と西の町田市に接している．一方南は多摩丘陵の末端に近く，至る所に谷戸（やと）と呼ばれる小さい谷があり，豊富な湧き水によって緑あふれる雑木林や水田ができているので，植物の種類が多く，昆虫や鳥もたくさん住んでいる．ところがここにも開発の手が延び，自然が破壊されて緑が減ってきた．それを案じて10年ほど前に当区新治町に発足した「自然を守る会」の方々が，観察会を行ない写真を撮り生物を調査して記録した結果をまとめたのがこの本だという．A 3 判を短かくした形の横開きで，2 頁にわたる大型から小型のまで大小合計100余の写真は何れも色美しく生々と自然を捉えていて，どこを開いても楽しい．写真の約 6 割は植物の生態や大写し，残りが鳥や昆虫，そして興味深い解説が付いている．配列は春夏秋冬の順で，3 月第 1 週「ニワトコの週」から始まって第 2 週「カントウタンポポの週」次いでイノデ・カタクリ・アケビ…と続き，翌年 2 月第 4 週「ウグイスの週」で終っている．植物の見出し21，昆虫14，鳥 8，その他5となっている．巻末に15頁の資料編がある．「新治，路傍の花暦1990」は230種の植物の10日毎の花の咲き工合を 3 段階で表示した記録の表で，「新治・三保の植物雑記」は雑木林・シダ・春植物・ハンノキ林・失われゆく草原の植物・固有種・山地性種の遺存についての説明，次に蝶・トンボ・野鳥に関する記事があり，最後にこの 9 年間に緑区の自然環境が開発によってどれだけ失われたか，いつか・どこかで・たれかが何とかしなければ，と結んでいる．

（伊藤　洋）

阪井與志雄：**マリモの科学**　202pp. 1991. 北海道大学図書刊行会，札幌．￥1,854.

マリモは，名まえは人々に広く知られているが，どのような生物ですか？生態は？生殖方法は？などと訊ねられてすぐさま答えられる人は多くない．湖底に生育する，分布域が限られる，特別天然記念物であることなどもあって，調査研究のグループや研究者が限られる傾向にあり，成果の報告も学会誌や専門誌などよりむしろ文化財保護関係や自治体の刊行物などに多く，従ってマリモについて知見を総合的に蒐集するには相当の努力が必要である．著者の阪井興志雄氏は元北海道大学海藻研究施設長で，マリモが分類上所属する緑藻シオグサ属（*Cladophora*）の分類を専門とし，北大理学部の助手時代より山田幸男教授に協力してマリモの調査研究に携わり，爾来マリモについて知見を深め，その保護にも深心を持ってこられた方である．マリモについて現在どこまで知り得たか，研究者はこれから何を解き明かそうとしているかをまとめたものが本書であるという．13章から成り，マリモ発見の歴史，分布，集団の構造，藻体の構造，生殖及び生長の様式，球化，生理及び分類等を扱い，最後の章で阿寒湖のマリモ被害と保護対策を述べている．引用文献は88に及ぶ．芝生のように拡がっているものが多いこと，栄養繁殖のほかに 2 本の鞭毛をもつ遊走細胞をつくること，水深 1 m，波長 3 m，波高30㎝ のとき直径 5 の球体は6.2㎝の幅で動き，1 時間に2,980回転することなど，新しい知見に遭遇する読者も多いと思う．人工球化についての紹介もある．残念なこと